
ジョッダン！！

戸松駒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョッダン！！

【Nコード】

N9596X

【作者名】

戸松駒

【あらすじ】

男子校と女子校がいきなりの統合！？

いろんなことが願ったり叶ったりだ！

それをよそに女子校は歓迎ムードではなかった……

それをなんとかしてこそ男だろ！

そう意気込む健太。

しかしそうは簡単にはいかない。

それに立ち向かっていく健太の物語です。

元旦の願い

ごく普通の男子高校。

そこに通うある高校生。

この物語の主人公である榊原健太。

まさかその男子校が共学になるとは誰も予想していなかっただろう……

ある朝礼。

朝は早い。

しかも春先でまだ肌寒い。

「今日は生徒諸君に大事なことを伝えます！ 静かに！」

司会の教師が注意を促すが静かになるはずもなく、逆にあちらこちらから野次が飛び交う。さすが男子校だ。

「おほん……」

校長である天王寺海才が咳ばらいを一つすると体育館内は途端に静かになった。

野次を飛ばす輩など居るはずもなかった。

それもそのはず、天王寺海才は空手5段、柔道、剣道6段を持つ格闘家であり、天王寺グループ会長も勤めるスーパ―老人である。

その身から溢れんばかりに出るオーラはどんな人でも圧倒する。

「本日は皆に伝えることがある。突然だが来月から我が校は竹下女学館と統合することが決まった。」

ざわつく生徒たち。その中に俺もいた。

「女子校と統合ってことはこの汗くさい男子校とはおさらばってことかっ！」

嬉しさを隠しきれず声に出して喜ぶ健太。

それは健太だけではなく、隣にいる親友の斎藤純もだった。

「やったな！健太！ついに毎年元旦に願っていたことが叶ったぞ！」

「そんなこと、毎年祈るならもつと実用的なことを祈っとけ。バカ！まあでも共学になんのは嬉しさの極みだな！」

ひしっと抱き合う俺と純。

しかしこれはBL行為ではないことをわかってほしい。

また海才が咳ばらいをすると静まり返る体育館。

「来月から実施されるのでこの校舎とも今月が最後だ。月末には大掃除をもらうからな、覚悟しておれ。これで話は終わる。解散！」

海才の言葉により、再びざわつきはじめる。

「それにしても女子校に俺ら男子が行って大丈夫なんかね？」

顔に満面の笑みを浮かべて無邪気な目をして尋ねてくる。

心なんか全然無邪気じゃないくせに

というのは心にしまっておこう……

「竹女は馬鹿でかいからな。大丈夫なんじゃないか」

「ってそんな話じゃないから。これだから鈍感健太は……。要するにお嬢様たちの園に俺らみたいな野蛮な男子が入って大丈夫かって話だ。馬鹿！」

なるほど。そういうことね。……って鈍感とか野蛮とか馬鹿とかめっちゃくちゃ馬鹿にされた気がする。

「馬鹿にしたつもりだけど」

「勝手に心を読むな！」

「それは失礼しやした」

「まあ許してやろう」

竹女はお嬢様が通うエリート校である。

こことは逆の方面にある旧市街に建てられている。

それなりのお金持ちが通う学校でもあるのである。

来月か……。そしたらあの子に会えるといいな、あの子に。

懐かしい声

一ヶ月はあっという間だった。

その間なにをしていたかと聞かれるとなにもしていないという答えが妥当だろう。

それでも今日、俺は竹女へと向かう。

緊張で昨夜は眠れなかったからか目がしょぼしょぼする。

あの子に会えると期待しているのだろう。

そんな期待、無駄だろうに……。

竹女は俺の家から歩いて10分くらいのところにあり、案外近い。

この時間帯は人が少ないが、周りには女子しかいない。

なんかこっちを軽蔑の眼差しで見てるんです……。

そんな目されても感じたりする変態的な性癖はあいにく持ち合わせてないですから。

てな感じで一人解説をしてないと持たないくらい周りの視線が恐い。

今頃になって行くのが嫌になってきたよ……。

そんなネガティブモードになっていた頃、後ろから聞き覚えのある声が聞こえ……なかった。

「そこは普通に聞こえてください」

こいつはえーっと誰だっけ？

記憶にないやつは置いておいて早く向かうことにし……

「ないで！なんで今日はそんなにひどいの健太は！」

「はいはい、めんどい」

「いきなり話を切らないで！」

「……………」

「無視はイジメだよね。ね？」

「……………」

「だから無視しないで！」

朝からうつとうしいやつに捕まってしまった。一生の不覚！

というのはさておきこいつは斎藤純。小学校からの腐れ縁で、友達（仮）だ。

「（仮）だった!？」

隣でぎゃんぎゃん騒がれるのはうるさいのでそろそろやめてやるか。

「でさ、純。今日はなにすんだ？」

「今日は始業式、HRで解散じゃねえか」

「おう。サンキュー」

「いえいえ。これぐらい朝飯前だって」

純は曲がれなりにもうちの学校で生徒会長をやってたから意外と使える。

たわいのない話をしながら足を運ぶと目の前に素晴らしい光景が広がった。

見渡すかぎり女の子、女の子、女の子、女の子だった。
今日まで生きててよかったと心から神に感謝。

隣では純が

「母ちゃん、ありがとう！」
とかなんとか言っていた。

校門をくぐるとすぐに案内の看板が見える。

それに従い向かおうとした瞬間。懐かしい声が聞こえた。

そう、それは懐かしい。聞いていると癒される声。

すぐに俺はわかった。

あの子は変わってないな。

二葉の声だと気付いた俺はすぐさま声のするほうへ走り出した。

隣ではなにかを悟ったかのように純がこっちを見て頷いてくれた。

物分かりがいいやつでよかった。持つべきは友達（仮）だよね☆

「だから（仮）をとれー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9596x/>

ジョッダン！！

2011年11月4日03時07分発行